



三船文彰

(みふね ぶんしょう)

1954年台湾台南生まれ。岡山朝日高等学校、国立台湾大学歯学部卒業。岡山大学口腔外科を経て、33年前より岡山市で歯科医院を開業。

14歳の時に父親の抽象画家、劉生容とともに日本に移住。幼少より父からヴァイオリンの手ほどきをうけ、14歳のときにチェロに転向。チェリスト岩崎洋氏の導きで、故斎藤秀雄氏の最後の門下生となる。多くの日本を代表する音楽家との交流を始める。

大学時代より盛んにチェロ演奏を行い、音楽プロデューサーとしても、25年前より内外の一級の演奏家を招いての一期一会のコンサートを120回以上企画し、すべて成功に導いた。

中でも2003年から伝説のピアノの巨匠ルース・スレンченスカをアメリカから招き、78歳の日本初演から93歳のサントリーホール・コンサートまで、30数回の歴史的なコンサートを行い、NHKやOHKがドキュメンタリー番組を放送し、劉生容記念館レーベルの「ルース・スレンченスカの芸術」19枚のCDが「レコード芸術」誌で特撰に取り上げられるなど、ピアノ演奏史に豊饒なる1ページを付け加えた。

2011年4月　臺灣台南の奇美博物館の銘器2本を貸与され、岡山の4都市で久保陽子氏の独奏による「八田與一記念及び東日本大震災追悼コンサート」を行う。

2011年12月　東京の求道会館で(一社)大学女性協会の主催による「東日本大震災慈善チェロソナタリサイタル」を行い、美智子皇后陛下ご臨席の榮誉を賜る。

2012年　久保陽子氏とともに被災地雄勝町などを巡回演奏。台北でも、奇美博物館の銘器を使用し、台湾の大震災への援助に対しての「ありがとう!台湾」コンサートを開催。

2013年12月に御所に招かれ美智子皇后陛下とニューベルトのピアノ三重奏曲を演奏。

2014年より　弘中孝氏と岡山、東京、大阪、台南でフランク、ショパン、ラフマニノフのチェロ・ソナタを多数演奏。

2017年　岡山ルネスホールにて内外の劉ファミリー20名による「Liu三船ファミリー Art Ensemble」を開催。

2018年　サントリーホールでの「ルース・スレンченスカ ピアノ・リサイタル」が奇跡のコンサートとして多くの音楽愛好家の記憶に刻まれた。

2019年9月13日　紀尾井ホールにてクララ・シューマン所有のピアノと奇美博物館蔵のヨアヒムのストラディバリを使用し、「クララ・シューマン生誕200年バースデー・コンサート」を開催。

2020年4月　岡山シンフォニーホールと紀尾井ホールで準備したルース・スレンченスカ(95歳)の「ベート・ヴェン生誕250年記念 ピアノ・リサイタル」はコロナ禍のため中止となる。

<http://liu-mifune-art.jp>



弘中 孝

(ひろなか たかし)

6歳からピアノを始め、東貞一、井口愛子、井口基成の諸氏に師事。桐朋学園に学ぶ。

1961年第30回日本音楽コンクール第一位、特賞ならびに安宅賞を受賞。その後ヴァン・クリバーン国際コンクール入賞、シラ国際コンクール第一位。ロン=ティボー国際コンクール第4位入賞。

1963年から1965年フルブライト給費留学生としてジュリアード音楽院に留学、S.ゴロニツキー教授に師事。1966年から1969年マセイユ音楽院にてP.バルセビ氏に師事。

1969年より本格的な演奏活動を開始。オーケストラとの共演、リサイタルや室内楽の分野でも1974年に結成した桐五重奏団を中心に国内外で活躍。また国際コンクールの審査員、音楽祭ディレクターをつとめるなど現在に至るまで多彩な活動を続けている。

2013年3月まで東京音楽大学教授として後進の指導にあたる。

これまでに、ソロCDアルバム「ブラームス:ピアノ作品集」「ブラームス:ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」、「シューマン:交響的練習曲」をリリース、各方面から高い評価を得る。



Sergei RACHMANINOV

ロマンチズムの極致
2大チェロソナタ
リサイタル

2020年
10月24日(土)
林原美術館(岡山)
主催 林原美術館

12月12日(土)
紀尾井ホール(東京)
主催 刘生容記念館・岡山
Liu Mifune Art Ensemble

Program

フレデリック・ショパン
FRÉDÉRIC CHOPIN (1810~1849)

チェロ・ソナタ短調 作品65
Sonata for Cello and Piano in G minor Op.65

- I . Allegro moderato
- II . Scherzo. Allegro con brio
- III. Largo
- IV. Finale. Allegro

セルゲイ・ラフマニノフ
SERGEI RACHMANINOV (1873~1943)

チェロ・ソナタ短調 作品19
Sonata for Cello and Piano in G minor Op.19

- I . Lento-Allegro moderato
- II . Allegro scherzando
- III. Andante
- IV. Allegro mosso

三船文彰(チェロ)
BUNSHO MIFUNE, Cello

弘中 孝(ピアノ)
TAKASHI HIRONAKA, Piano



口 にするのも面映ゆいくらい、
今や「ロマンチズム」という
言葉は時代にそぐわない死語となりつつ
あるようです。

無形な物に対しての憧憬の念や情熱は、ITの力で瞬時に情報入手でき、思考の断片をデコレーションし、不特定多数の人々に発信でき、リアルタイムに反応が得られる今の時代では薄れるばかりです。

己の小ささを自覚しながら、想像力と感性を働かせ、見えざるものに繋がろうと命を燃やし、創出された19世紀の西洋文化の数々。

本日の2曲のチェロ・ソナタはそういう意味において、まさに「ロマンチズム」の時代の最上のエッセンスであり、体も脳もまだ自分のものであった時代への郷愁に浸るための、せめてのよすがとして、奏で続け、聴かれ続けてほしいと、願うばかりです。

(三船文彰)

ショパン
チェロ・ソナタ短調 作品65

ショパン(1810~1849)がピアノ以外に興味を示した唯一の楽器がチェロだったのは、親友がチェリストであることにその理由があったようだ。

ショパンが1831年9月パリに初めて着いてから、生涯を通じて親友となった名チェリスト、フランショーム(1808~84)は出版業者との交渉に関してはショパンの代理人の役割をつとめたり、ショパンの数少ない公開演奏会をするに当たってはパートナーとして組んだり、彼に捧げられたこのチェロ・ソナタの初演を1848年2月16日のショパン最後の演奏会で共演した。そして、1848年10月死の床についたショパンは彼を脇に呼んでモーツアルトを弾いてくれるよう頼んだ。

二人の深いすばらしい友情が数少ないチェロ音楽に一つの宝を加えることになった。

ショパンの最後の大作となったこのチェロ・ソナタはヨルジュ・サンドとの愛が破局し、体が結核に蝕まれ健康が衰えていった1846年頃に作られた。しかし、体調と環境の不調とは正反対に、曲の内容はエネルギーで雄大、起伏に富み、ピアノのパートはショパンならではの華麗な書法で書かれており、チェロパートもフランショームの助言の功があつてか、技巧的に申し分なく効果を發揮している。ピアノとチェロが対位法的に複雑に絡み合い、大作曲家としてのショパンの創作の集大成のみならず、19世紀を通して最も独創的なチェロの作品の一つとなった。



ラフマニノフ
チェロ・ソナタ短調 作品19

大ピアニストで作曲家のラフマニノフ(1873~1943)の唯一のチェロ・ソナタは大先輩ショパンが最晩年に残したチェロ・ソナタと類似点が多い——調性が一致していること(ト短調)、メロディーがきれいなこと、構成が近似していること(4楽章)、そしてピアノのパートが重厚で、最高難度(大ピアニストの作で当然のことだが)などが上げられるが、何よりも二人とも生涯の親友でチェリストだった友人との友情からチェロ・ソナタが生まれたのは興味深い(ショパン — フランショーム、ラフマニノフ — ブランドゥコフ)。

22歳時に作った第一交響曲の初演の不評(指揮したグラズノフが泥酔していたためと言われている)で強度の神経衰弱になり、まったく作曲の筆が取れなくなったラフマニノフがゲール博士の暗示療法により、1901年(28歳)の春にかの有名なピアノ協奏曲第2番(作品18)に着手して自信を取り戻し、続いて同年の夏に作曲されたのがこのチェロ・ソナタ。

ラフマニノフ特有の哀愁を帯びた馥郁とした抒情、協奏曲も頗負けのピアノ・パートのヴィルトゥオーゾの書法、そして雄大なロシアの大地を思わせるメロディー、…ピアノ協奏曲第2番や第3番同様、聴き手を魅了してやまない。

